

石巻・大川小学校への旅

日本史教諭 柳沢祐子 ※0

東日本大震災から1年。3月11日午後2時46分という時刻を、あの大川小学校（石巻市）で迎えようという企画が、私どもが勤める飛鳥高校・地歴科の三浦先生(世界史・地理)、鈴木先生(日本史)を中心に持ち上がりました。やはり日本史の石井先生と私とあわせて4名。さらに亜細亜大学に合格した12期の文化祭実行委員長のNさんが急遽メンバーに加わりました。

飯坂温泉から石巻へ



飯坂温泉の共同浴場 波来湯

3月10日(土)の午後、初日の宿、福島市郊外の飯坂温泉を目指しました。夕方5時過ぎにはその宿Hに到着。夕食時に女将(おかみ)から、被災県である福島と飯坂の状況をうかがいました。福島市は原発から60kmほど離れていながら放射線量の高い地域です。しかし、同じ市内でもこの飯坂は放射線量が低めで、地震の揺れも、地盤の固さゆえかあまり小さくなく、建物の被害も目立ったものはなかったそうです。ただし台風の時期にひどい雨漏りが発生し、震災のダメージに気付いたとのこと。風評被害については、今はないがじわじわと出てきているようだとのこと。現在は、復興のために宿をと

る人の受け入れが多いそうです。原発の警戒区域整備のために、高知県警の人達が泊まっていたと聞きました。

食事会場では、ふすまを隔てた向こう側のグループが、はなはだしいお国言葉で、大声で歓談しながら食事をしていました。女将さんによると、飯館村の人達が、避難生活の疲れをいやすために、この飯坂温泉に宿泊しに来ているのだとのこと。飯館村は、原発から北西に40kmも離れているのに計画的避難区域にかかる地域です。美しい田園でのどかな日々を送っていた人々の生活が、原発事故によって破壊されてしまいました。避難を余儀なくされている村民の方々が、温泉で憂さ晴らししたい気持ちもわかります。後で、館内のカラオケ・コーナーで歌っている声が聞こえてきました。歌は千昌夫の『北国の春』。「あのふるさとへかえろかな～」というフレーズが聴こえてきて、皆さんの切実な願いと重なり、何とも言えない、せつない気持ちで聴きました……。



石巻漁港近く、倒れたままの缶詰大和煮の看板

翌11日は、9時に宮城県石巻を目指して宿を出発。石巻市に近づくにつれて、震災・津波の被害の状況が次第に目に入って来るようになりました。市内に入り、

沿岸部の道路を走って行くと、すでに津波の被害を受けた宅地のほとんどは更地となっていて、わずかばかり残っている住宅は、2階建ての1階部分が津波によってズドンとぶち抜かれたようになっていて、柱だけが残った状態でした。波の力のすさまじさを目の当たりにしました。高く積み上げられたがれきの山が続くのを横に見ながら、車は走ります。石巻は最も多くのがれきが残されていると言い、車1台1トンとして、600万台分もあるのだそうです。



被災した石巻市立門脇小の校舎内部 ※1

正午頃、津波と火災に見舞われた、廃墟のような門脇小学校の前に車を止めました。ここは昨年末の『紅白歌合戦』で長渕剛が歌ったその会場でもあります。津波が襲ってきた時、生徒たちは裏山に逃げて犠牲にはなりませんでしたが、校舎内は生々しい破壊の状況がそのまま残っていました。横にある墓地は、鈴木先生が夏にボランティアとして清掃を行った場所でした。先生が行った当時より墓石もかなり復旧した様子でしたが、右手を見ると、近づいてくるたくさんの喪服姿の人々が見えてきました。震災から1年、命を失った多くの人々とその家族の

悲しみが車から降り立ってじかに感じた空気から伝わって来て、胸がつまりました。石巻では4000人近い方の命が失われています。この日は街中に喪服を着た人々があふれ、いつもと異なる空気に支配されていました。

市内から大川小学校跡へ

その後、地震発生時刻に間に合わせるために、昼食をとらずにそのまま大川小学校へ向かいました。時ならぬ渋滞の道を、午後2時46分まであと30分という時刻に現地に到着。200人前後の人がそこに集まっていたと思います。慰霊祭は一週間前にすでに済ませており、遺族の方は多くはなかったようです。



石巻市での大川小学校の位置

大川小学校は、海岸に近いので津波被害に遭ったわけではありません。校舎の横に大きな北上川が流れていて、その河口から4kmもさかのぼった地点に学校がありました。海など全く見えません。それだけ海から離れている場所に、津波が川をさかのぼってやって来るとは想像出来なかったのも、無理はないと思いました。大川小では108人の生徒のうち、74人が命を落とし、教職員も10名亡くなっています。小学校の前には、慰霊のための祭壇があり、私達は高速のSAで買っ

たありあわせのお花をささげて、犠牲となった方々の冥福を祈りました。

私達は、震災時にどのように対応すべきだったのか、といったことを考えながら現場周辺を歩き、その惨状を目に焼き付けました。大川小は先進的なデザインの校舎でしたが、水の力により鉄筋でさえも無残に引きちぎられ、コンクリートの躯体は破壊されてしまいました。まさに廃墟です。裏山に登れば助かったかもしれないという場所も見学して来ましたが、当時は雪が積もっていてすべって登るのも困難だったようです。立木には、波が上がってきたと思われる高さにももが巻かれていました。こんな所まで浸水したのかと驚かされる高さでした。

そうしている間に、「その時刻」が迫って来ました。人々は次第に祭壇の周りに集まって来ました。午後2時46分を迎え、しばらくの沈黙の後、堤防の上に詰めていた消防隊が、サイレンを鳴らしました。それがちょうど黙とうの合図のようになり、人々は手を合わせ、黙とうをささげました。前の方の遺族の方々と思われるあたりからは、小さな嗚咽(おえつ)が聞こえてきました。



石巻市立大川小学校の廃墟と校庭

実際に津波が大川小を襲ったのは、地震のあった時刻から約50分後のことでした。

その50分の間どうしていたのか？が疑問になります。50分もあれば、相当遠くまで逃げることができたのではないかなぜそこにとどまったままだったのか？そもそも大川小は、災害時の避難場所に指定されていました。ここが本当に避難場所として適切な場所であったのか？同様に、東京に住む私達も、その避難場所は本当に安全な場所なのか？を見直す必要があると思いました。

大震災の教訓の一つとして

また、そこから避難するに際して、大川小では先生達もどこへ逃げたらいいか明確な指示ができなかったのです。避難する方向に迷い、やっと生徒達を連れて歩き出したところへ津波が襲ってきた、ということです。私は、大川小付近の北上川の堤防の様子を見て、この堤防は川の大きさの割には低いのではないかと感じました。津波が来ることの想定は難しいとしても、川が台風などで洪水を起こす危険はあります。この北上川は過去に洪水が起きたことがなかったかもしれませんが、それにしても・・・と危険を感じる低い堤防でした。リスクを想定し、いかに安全な場所を選んで住むかということも重要だと思います。※2

津波の被害に遭ったこの地域は、今後どのようにして行くのかを、よく考えなければなりません。再び小学校をその地につくるのか、宅地も同じように利用していくのか・・・。大川小で多数の犠牲が出たことについて、誰が悪いのかということにこだわるのではなく、しっかりと起きたことも直視し、関係者が心からの謝罪をしたならば、後は犠牲者の死が

無駄にならぬよう、再び前を向いて進んで行かなければならないでしょう。

歴史の教員としては、過去に学びその教訓を未来に生かすことが大切だということを、改めて思いました。今回の震災以前には、このような被害を想定できなかった私達です。今後は同じような被害が出ないよう最善の対策を考え、措置していかなければなりません。東日本大震災が歴史の事実の一つとして加わったわけです。その教科書にたった一行だけしか書かれていない出来事でも、実はたくさんさんの教訓を含んでいるものです。過去の歴史に、真摯に学ばなければならないと思います・・・。

帰り道、車中からたくさんさんの仮設住宅を見ました。殺風景な住居でした。このような住まいで生活し、今後のことを考えていかねばならぬ被災者のご苦労は大変なものです。震災から一年経ったところですが、被災地の人々に心を寄せ続けることを忘れないでいたいと思います。



**大川小での柳沢・鈴木・三浦教諭 撮影石井教諭
追補**

※0 柳沢教諭は、福島県白河市出身で、2017年4月より都立八潮高等学校教諭。

※1の写真は、三浦が撮影。

※2 大川小学校は2016年に震災遺構として保存されることが決まった。また

18年4月には隣接の二俣小学校へ統合される予定です。

さらなる追補

寄稿者の柳沢教諭は、日本史の授業に関するご自身のブログをお持ちです。

関心のある方は、以下のサイトをご覧ください。

『日本史学習拾遺』

<http://blog.goo.ne.jp/kuragesuke>